

とかく内容が堅苦しくなる研究雑誌を広く市民の皆様に読んでいただく為の方途として「市民の広場」を設けましたが、周知の通り、これが大変親しまれ多くの読者層を得た原因にもなったそうです。編集の一端を荷なったにすぎませんがこれ以上の喜びはありません。私事で恐縮ですが、私設文庫の「奈麻余美文庫」を季刊発刊しておりますが、その基本精神を『市史研究』から学び取りました。レイアウトを大切に、校正に念を入れること、簡単なようですが大変根気のいる仕事です。

『市史研究』第六号には私の「愛媛の近代建築のルーツを探る」と題し、小論文とまではいかないまでも、レポートが掲載されました。藤村式建築と呼ばれ山梨の近代建築の第一人者、大工・棟梁小宮山弥太郎が愛媛の近代建築（愛媛師範学校）を建てた事実をいろいろな文献をあさり調査した結果を報告したものです。発刊後数カ月して、松山市の近代建築史を研究するグループから電話を受け、これがご縁で、御地におもむき、山梨の近代建築が愛媛の近代建築に大きな影響を及ぼした講話をする機会を得たことはこれまた私の喜びとするところです。このグループとは、その後も資料や情報交換を積極的に行い研究を重ねて居るところですが、火種をつけてくれたのもこの「市史研究」のお蔭だと思っております。

「市史研究」第五号は、武田氏特集で誠に読みたえのある特集号でした。磯貝正義、中沢信吉、服部治則、斎藤典男、守屋正彦、柴辻俊六ら各委員が健筆をふるい、論題も単に歴史の範囲にとどまらず考古や軍学芸術など多岐にわたり、好評で大変な注文が相ついただと聞き及んでおります。私も県内外の知人、友人から頼まれ何回も郵送したことを思い出します。一冊一冊は薄い冊子ではありますが

が、全十巻の記述内容は大著に劣らずまさに甲府の歴史そのものであり、将来、学究の徒はもちろん広く市民に愛読されんことを切に願う感想の一端といたします。

（市史編さんを終えて）

専門委員 守屋 正彦

甲府市というのは山梨県の中心としての歴史が極めて長く続いて来たところで、その中でも政治的な中心としては武田信虎以降、現在までということになる。

特に甲府が政治的中心となった室町末から近世、近代にかけての文化が隆盛を極めたのも、この政治的中心と呼応していると考えられる。私の担当した美術・工芸の分野では余り、近世上の特色を強く指摘できなかったが、市史調査を経てのさまざまな資料の発見は、今後に大きな甲府の文化を考える重要なものとなるであろう。

ブルクハルトが著わした『世界史的考察』という本には文化が成立する三つの制約として、政治的制約、経済的制約、宗教的制約の三つを指摘している。この構図は私が文化史、あるいは美術史を考える上で大変参考となったが、『甲府市史』を執筆するにあたって、私にとってははじめて、美術史的な流れを意識する上で念頭から離れることはなかった。

私にとって市史調査で最も想い出深い発見は、一蓮寺の「妙沢不動」との出会いであった。

甲府を中心とした山梨県は、指定文化財の優品に見るならば、平安末からの中世文化が隆盛の地で、その文化財は東国においては質

文化遺産にふれて

調査協力員 相原 眞 洋

量ともに高いもので、いかに武田氏が中世を通じて文化的腐心を行って来たかが良くわかるところである。この中で、特に禅宗は山梨県出身僧が、中央で活躍。その資料は今日、わずかに垣間みるにすぎなかったが、世に「妙沢不動」と言われ、大阪市美術館の重要美術品や、東京国立博物館など、わが国の古美術の殿堂ではいくつか所蔵が見られる龍湫周沢（＝妙沢）の「不動明王図」は、周沢の出身が甲斐武田氏であることを考えると、どこかにあるはずだといつも私の中で宿題のように考えていた画像であった。

一蓮寺調査の折、箱書にある「妙沢不動」の名は私の中で、禅宗と時宗の疑問をいだきながら、驚きを持って「真蹟であって欲しい」と、蓋を開けて、軸をひろげたことを思い出す。正に妙沢不動、甲州最初の画僧の出現を見たのである。

この「不動明王図」は江戸時代の奉納に関するものであったが、一蓮寺は武田氏、一条氏の開いた寺で、その由縁であったのであろう。龍湫周沢は天竜寺第十五世になった人で、京都の禅宗文化の中心にいた僧である。この時代の「不動明王図」の作者としては、先づ妙沢と第一に指を折る画僧が、出自の地に眠っていたことは、私にとつて『甲府市史』を担当したという自負と喜びをこの画から与えられたのである。

さて『甲府市史』も完結となる。事務局として多くの御苦労を背負われた高木氏、数野氏をはじめとする編集担当諸氏に深く感謝を申し上げたいと思う。私自身、満足でなかった多くのことが心残りのままであるが、今後に新たな「甲府の美術」を肉付けしていこうと思う。

甲府市制百周年記念事業として計画された市史編さんに調査協力員として参画する機会に恵まれ、金桜神社を始め宮本・能泉地区内の旧区有文書等古文書の調査、宮本・能泉・羽黒地区内の石造物調査を担当した。

金峰山を始め多くの山頂の石祠、集落毎に構築された道祖神、路傍の馬頭観音、観音霊場の供養塔、庚申塔、地藏像、鳥居、石橋、石灯笼等種類と数の多さ、これらを保存して来た先人、地域の人々の情熱に深く頭を下げたい思いがする。

特に山中共古先生が「甲斐の落葉」に甲州で珍しき物と書いた金秋石の石灯笼、荒川ダム東側のダム建設に伴い移転された川窪町内全ての石造物には感激した。

しかし乍ら心ない一部の人に持ち去られたものもあるとか、市史資料を含めこれらの文化遺産を末永く保存することを望みたい。

（市史編さんを終えて）

調査協力員 落合 四郎

市史編さん調査協力員を引き受けて早六年が過ぎようとしています。この間特別な御協力も出来ず汗顔の至りですが、この大事業に些か関わった者として感銘を深く致しました。磯貝先生を委員長に各専門委員の先生方や事務局の皆様方の一体となったチームワークに依り、膨大な史料の発掘収集や又その史料の年代別等仕訳の仕事